



又參授基平鄉
也
平等院僧正
三井寺圓滿院
祖師也

前大僧正行尊

山林幽處多生姪子，也似真山中人也。
得之全體，失之全體，人所知者，只在真

周防内侍

獨身のものと向て内侍ツバメ
御事のうちよりは小町さのまよひ
御事のうちよりは小町さのまよひ
周防内侍
まちかわのさんじやくめまわす
まちかわのさんじやくめまわす
千載集新チヤウジツシン　如月を以て月のあらわせ候
そくへはうはうあくと物がくはうはう
周防事あゆて枕をかぶとんのびやくよりかどもあゆ
忠良の又成カニシ　是と枕まで肘とをのりこむ

周防守促四位
上結仲女也
大和守美忠妻
後冷泉院女房

虚室の間よりとカヒナクとカヒミハシナ
て意を樹と其樹たるもうちも甲斐等
タタキ人言ふ事とコツシ御押縛ヤヒナリ本甲斐
月子ムツヅノ二日ニヒのうち春の夜の云がれ
モアハシカヒミハシナク

あてぬぢアムシムカムナムアリムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムムム
ムムムムムムムムム
ムムムムムムムム
ムムムムムムム
ムムムムムム
ムムムムム
ムムムム
ムムム
ムム
ム
ム

三條院

大治又冷泉院
寛弘八年六月
即位長和五年
正月御壤位寛
仁五年改元為
治安按二寛仁
元年五月崩御
出家ノ事或記
云同年四月十
九日云：

父肥前守搗元
愷也
俗名永愷号古
曾部入道

能因法師

魚甲

強
身の如きをもつて、
かくの如きをもつて、

後拾遺狀

永樂四年內裏考定公私之數

三の山より別神南備山と大和國高市郡
アラシ吹ニ山ノ葉ハハハの辞を上り
嵐吹ニ山ノ葉ハハハの辞を上り

神南備乃三室
能山乃帶爭爲
苗飛鳥何

右八高市郡ノ三
室山ノ哥也

能くうたる詩よりの田むかひの如き
とて竜田ノ川乃と云乃と如し「首のやま山風の吹
きすむらやめのみをもつ様すと列すもと
そひぞごくよゆめを流す綠の如きうらりと
あふる風の烈さあるまくらへを流してくらんきた
まことすむ要しうもの山のみのものもゆゆるど
くと解らる風吹きあらひひきくればはす後世の
人等の阿周和を讀んで讀む止むにけり
のく解ざるのをこゑくと讀ひやまくと讀え

嵐吹紅葉之圖

立田河紅葉バ
十加ル神十ビ
ノ三室ノ山ニ
時雨フルラジ
拾神南備ノ三室
ノ岸ヤ崩ラム
立田ノ河ノ水
ノ泻レル
立田河シガラ
ミカケテ神南
備ノ三室ノ山
ノ紅葉ヲ少見
ル
右ノ平群郡神南
備ニ三室山也其
外ニモ讀タル
奇多シ

ア耳其決ニ高布那ニ延志式の神社ノニ神有
備ニニ字の山モトモ持ムニシモ在布ナリモ備
テ平群那ニ延志式の祐社ノニ神有備ニニ字の
山モトモ持ムニ竜田山ニ在兩行ノニニ延志式の神
モトモ持ムニニ字の山モトモ持ムニシモ在兩行ノニニ高
市那ニニ字モトモ持ムニ竜田山ニ延志神社ノニ
トモ年モトモ平群那ニニ字の山モトモ持ムニシモ在兩行ノニニ高
神社ノニニ字の山モトモ持ムニシモ在兩行ノニニ高
市那ニニ字モトモ持ムニ竜田山ニ延志神社ノニ
トモ年モトモ平群那ニニ字の山モトモ持ムニシモ在兩行ノニニ高

ザノ名トキニ本ヲ解

延喜式ニハ毎ヤウニ見ユル

惑フベカテズ

ミ常とくの向ふよりもくはす題詠をあら
ゆ書て又もばらばらとまちてあるが
りもれどもつまやう御事なるて治代のよ
くもませもむかむる御事なるて天日御事
は御事なるをヤマシロもよヤマ山とし水
をうロも水場をう伯山水場とて水氣山場と
いふものとてうなづかせんとあゆみた所在のよ
うに水氣反て中を東西も垣在今堀河紙を海
生をうぐいす水氣能せゆる收ある堀井と

ソシモリ清一玉る大み傳とあすを山と水場
是アム武士と水傳とあすを水場の名
ある天と南面と在て山を背とする山背國
ソシカツラ河と水傳と水場の名
ホウ中を樹す列流す河と水傳と水場の名
カツ樹と水傳と水場の名
アツ流す樹と水傳と水場の名
カモの社在別樹の傳と水場の名
あるの神社あらじと水傳と水場の名
アツ形の桂の流傳傳の名

父不詳祇園別
當之大原ノ山
寺ニ住
後世ノ號ニ此
百首ノ中ニ此奇
十トハ別ニ手柄
モ毎奇ト云レ
シハ俗意ノ甚
ニハ夙縁ノ甚
數多在リ是ヲ
堅地塗ノ物モ
壁ニ謂バ漆ノ
在リ金碧繪ノ

良置法師

良選法師
湖^{何ぞ}いづくわとくわのうする
後拾遺集秋

物モ在亦ハ木ニシテ自然ノ木目ノ侵；物モ在リ此奇トハ自然ノ物ニシテ高々ツニスル也。此卷ノ題ハ「奇」也。

中納言源道方
男之
寛治五年任大
納言

大納言經信

萬物歎ミヨリ
生ズルコトハ
水穂傳ニ委

伊守重繩妻
之祐子內親王ノ
女房

祐子內親王家紀伊

まちよこくたのむかの仕事
スケスケヤマ
やまとゆめりとすみ
金葉集 悪 塚川のまつとまつと

師瀧とわ泉園とアタはま裏て
師をうへのゆかむとひそむる師人マ乃と云ひ
カケシヤのヤヒ反縛うてカケシヤカケモセ
ズニテうぶみと神ノスレと傳教のうみてせども人
レムコツモ押辞くスレとスルシモドキモ
シ師の復くもわざと評おもとひと佐男とよすけ
たゞ一ひめんのう師の復のかよせむと評判の
佐はのやうひと佐男ナリ別縁でとくらをもれ
はう室ヨリヤウセでいハルキモ傳れうちら
シモ世のくふとくきもせぬとくやまくとく

從四位上信濃
守成衡ノ男也

權中納言匡房

霞トハ本語ハ
力ハ陽ノスミハ
進ニ陽氣ノ澄
進ト云コトニ
力スニト用^{タマリ}之
カスムト云時
自ニカス云

八他乙

經信卿ノ男也
金葉集ノ撰者

源俊頼朝臣

五載集惠 持中御子俊大内家主
十載集惠 持中御子持中石達惠主
上

初瀬ハ初凡ニテ
灵合ハ初凡ニテ
セハ與ノ儀也
男女初テ與ノ
是人故ニ初瀬
ナ初瀬ニ祈セ
憂計ト云カリ
搘ニ麝コトノ
搘ヲウカリケ
ルト云端ハ終
搘ノ弟ニ
妹ガリ
友ガリ
ニクガリ
カアイガリ
右ノ外准ミ

あも初瀬ミ大和國ニ志を行ひよリレ
ナウカリキル人トモ至りてアヌヒバツセ
ナウカリミテ初瀬ニ志行たる山口レ
人アヌヒヤマヨモ押ハゲシカレミ本語ハゲ
シアレモ約ナリ但ナヒア、初瀬アリキモ
ナウカリミテ初瀬ニ志行たる山口レ
吹ヤムシキウタヅルモウレアリモウス
アリカサセアリモウレアリモウス

正二位右大臣
俊寮公男也

藤原基俊

之勝存廢後
千載集矣
信都光堂^{ルウカク}_{ニイタク}維麻^{ヒマ}キ會の海
而^テは謂^ス之^ミ徳性^{トクセイ}ま入道殿^{ムシナリ}不^ハヤリ^ハ入^ル

清水觀音爾現
ノ哥ニ
只タノメシメ半
力原ノサシモ艸
我ヨノ中ニアラム
カギリハ
法性寺殿此奇
ノシナ以テ答
ラレニ也

敵を殺すが原はりはりとあらんと手を拂ひのをそ
りもととえ貴く接ひ傳教する基督教の自らと
いふ事務の維持キリヤトナリ十日から十二日までその
まことに諸師の請を當て林野中の山城勝會
の海師ヨリモテの御みを各所に詔せよとよ
白毛城ヨリ勝會のまゝを基俊アリ息の
走るを勤めせよとほそに性を教ふれりあらざる
事多矣アリシテアリモハシタリハシタリ日暮早
かねと曰ひのどすとひの御もちうるをとくとくと
波々やねねとてよきとよきとよきとよきとよきとよ
波々やねねとてよきとよきとよきとよきとよきとよ

講師ノ請ニ渉レ
トキ先覓ノ而

サセモノサシモツ

北洋寢人仙
奈良ノ永禄ノ
方工基俊卿ヨ

二
リ賤ニレ江吾

ナラノ葉ニ霜

ヤオクラム思

二八
予テコソ
更日アコソ

シタノレテノヤ

又知足院瀬白
忠寔公也

新しむよしむらは常あ能いよしもフタノ石と木語アラ
ダツ古事くヒ甘夕枕羽をうクリモヰシ雲居ノミスムヒ
ミ泡立湯氣ヲ泡起テアスルをねアミ周白也のやま
キの連^{アキツナリ}トキニ向伊モテ水立ニ及スルモシ
シモ泡立トモキニ向伊モテ水立ニ及スルモシ

大師父鳥羽院

崇德院

保安四年
五歲受禪同二
月即位在位
十八年保元元位
年於仁和寺
出家同二十四
日移謫岐國長
寬二年放其國
治景元年
崩ス

詞花集

追号崇德院

休ともややひるせかくの
ゆきふらすらよそむかうた
詞花集あわ
歌もくらべ
けほもくわをそひておひとくとく
思ひてくまむコヒシム御とくがく流用でコヒシ御とく
三つの歌もくわをそひておひとくとく
けほもくわをそひておひとくとく
かくすまぢくはまもあよねさくらびとくかくの
ほあきうへセヨハヤシせお中の人のうらわや

美儂守俊輔
男
從五位下皇后
宮小進

源昌

金の事はあらゆる事に通じてゐる

尤京丈支頭輔

御内事の如きは、御内事の如きは、

修理丈夫頭季
卿ノ男之

新古今集

出でば百ひのうをもる

通志編纂始
于順治

待賢門院堰河

神祇伯頭仲女
待賢內院女房

もからむるにあらわす事か

千載良書

三

病氣のひめのやうが、してあるが、
も後石をあらわすのが始てあらが
りとてはいふを後引すからてあるのちが
たらまつる

大炊御門右大臣
臣公能公ノ男
也文治五年七月
仕左大臣

寛定公

後徳大寺左大臣

千載集集
曉用郭をいへるもと
侍ノルトモツルモ現在の辞も即そく丈もと
し在の月をもと前よりつるのノハ郭の景をもと

もとてはるのノテモトモのを思ひ又何を思
しやあくもとまつてはるの有のノアヤシムニキ
ほくさびのふとまつてはる片の有のもとて
うなづく元々アリもあらじとおもむき
けあはトトギスヒとよ名のまこと能讀りくもとせうの
名のもと冥金すとまつてはるの決する水道行

うあらもとあいもと

道因法師

治部丞清孝
男
俗名
従五位下左馬
助穀頼

千載佳書

欽定古今圖書集成

涙ト云語ノ本
ナ流ニ三八次ニ
タ玉之流水久
ノキ也

又帥擢中納言
俊忠卿頭捕卿
五
為子
三条位十云

千載社中恋
歌をひくと
オモヒワヒとよ思ひ人と思ひ前云我を恨
くサアモニ本語サレトモヒナを説たる詞くタヘヌト
堪シムトモ一ツの心ハシマ他ハシマかねどもいはゆのこゑ
恨シテてゆでルモウトモ思シテまゆるサマレトモ今ハシマか
まゆ馬ウキ憂シム堪シムの源ハシマタマリヤトハシマ著シタ
まゆ馬ウキ憂シム堪シムの源ハシマタマリヤトハシマ著シタ
堪シムトモ一ツの心ハシマ他ハシマかねどもいはゆのこゑ
堪シムトモ一ツの心ハシマ他ハシマかねどもいはゆのこゑ
白太后宮大夫俊成
せのやくわくわくわくわくわくわくわくわく
人

皇太子成

せうゆくわざうまくおもて

千載集ノ撰者
安元二年出家
放和奇處九
ノ賀ヲ給フ
十

千載集報　述情百事のちくやう

すれども強押されまじかの弊とての道
もよるを道らへゆきのちよと世間の世をや
がくがくのヨコヒナチニテシテソコチレシ
世間の道引人を思入山奥と道
奥ひこゑむわよあひ思ひ込むとてのふ
世間の道引人の思ひのわからぬを
思ひ入ての奥ひこゑむとてのふ

左京大夫顯浦
卿 / 男之
太皇太后宮前
大進正四位下

藤原清輔朝臣

新古今集本新

父八俊賴朝臣

俊惠法師
「もすがらむねやうど
まのひよくつよかうど」
副

千載白玉

あらかじめ

夜終ト云本境
モハゆ人晝ト云ラ
倉テ夜並終也
晝夜ト云ワタ
リテ云詞ニ夜晝
別テ云時ニ八
日経ノ
夜スガラト云

ヨモスガラ夜無終スカラ夜のをもをやうぢ、
モモホのとよて書う事シテアリ。御手も多く此の筆によ
リアチャラテモモテモ多めが、ヒマラ間とサヘ
モモ副シタ運トシカリケリの反キツレシト運トシキ
トモ一箇のくま人のへらのすちよとくらの書う事
モモかがりあつて、ヨモスガラ
あやうるおのむかはして、御ミヤの間ヒマも副シタ
の床シダも副シタ御ミヤの間ヒマも副シタ御ミヤの間ヒマと
床シダも副シタ御ミヤの間ヒマも副シタ御ミヤの間ヒマと

西行法師

かくそく
かくそく

人辭人

藤原秀郷ノ末
又左工門太
支康清人以重
代曾土仕法皇
俗名至清入
心於仏道保巡
六年十月十五
三歳
出家年二十
此彼方ニ付ルト云

卷之三

寂蓮法師

父俊海人俊成
卿猶子也
俗名定長尤中
將入道

ムラサメ本語
群細雨ムツシ細ナル
雨ノコトニ故ニ
露モマダヒスト
云ニ
アラサメト云時
皆細雨ノコトニ
春サメ
秋サメ
アサメ
小サメ
キリサメ

皇嘉門院別當

内院八法性寺
廻白 / 女人
大治五年崇徳
院立后
別當ハ俊隆女
トアレ共村上
源氏系団ニ不
見
内院女房也

筆のまゝの筋の一節のやゝよ一夜の後寐の變

きてもうおもひをそなへて
櫻のそよがさうして

蒙古文

様勢ぞ先づて、而して其の如く人

卷之三

後白同院第三

式子內親王

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

新古今集志

タマノヨリモトニテサムシテサムシ

をもとより人のヨリよきをうて今まのところタエナバ
二二二

カツリヘル
長姫シヨハモゾスルヒミエキシモヤハラスホノ弱ト

食の事は、何でもおまかせで、
伊豆の

「うそだよ。」

アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。

卷之三

殷富門院八後
白川院第一皇

大輔ハ高藤公
ノ末信成ノ女
ニシテ此院ノ
女房也

殷富內院大輔

如
手元船

アラセヤハヤヒタガハナホアマリサシレ
メハヨミメルモシムカトモシ
千載集 惠 お念はうな府志のふくそよ
シテシテ見せバヤナムセナシトアドニス
ナム歎シ雄略^{ヨシロク}陸奥キツアヤナム乃ム如キ
父ニシ前^{スル}手ニシモニ左右ノ筋^{スル}一子のん
君^{スル}セキシタヤモ既^{スル}御士のヌミ社^{スル}
モハ御^{スル}御^{スル}山^{スル} 霧^{スル}小^シ山^{スル}カモニヒ
トシシテ半ニシ初^{スル}御生^{スル}神^{スル}我^{スル}モ

後京極樞政前大政大臣

後法性寺興白
尊寔公男乞
譚良經公

後京極樞政前大政大臣
新古今集秋 百事是あすなりの事とす
キリス九十月のじ本のトナリニテモレヒ

重慶公
貴重公曾ノ
卦卦吉

魚ナリナヤトロヤの詩く不口ムトモサムロ

タ升ミ狹ミテモ別段延ミテ衣カタニキトミ

エモ片裏ツムモ得度麻ムカモアムトモカモ

カ智ミモトアテ別智モ布寐トモトモア得

病ヤムヘモ加毛モ深モトモアテモトモヤハ

酒レヒテモハ狹テモ得度麻ムカモアムトモ

以モチテモヤハムコモアムヘ秋の氣勢狭

遂のノハシテの神モ得度モマヌキモヤハ是

猶居テ我お此神の御事モトモヤハトモ

シテはあも苦ナカヤともナヤの詩く音の無し

けあらきくもあらか居てあらの御事モヤハ

ちもんちう

二條院贊岐

モジサセシナムミ申のスルモ
人知音モナムシナムカモシ

千載集惠 寄石惠トモアラ

我社ハムミ我ちのム酒瓶ム申のム酒干見
工又仲ノ石乃トモアラ酒瓶メ申のム申トモアラヘ
シ石乃ム乃ム如コソムヨウの詩ク強押辞
シラチムアラヌの通音シムアラムアラムア

正三位賴政ニ
女ヘ二條院ハ後白
河第一皇女也

見エヌト云エヨ
リ續クヌノ詩ノ
コトハ水穂傳ニ
妻シケレバ茲ニ
省ク

人ヨリ決あらぬと強りあらへてのうのやう我思て

往後もみる神を汝干するをまゆけの石の前で

人ヨリ決あらぬと強りあらへてのうのやう我思て

又右大將頼朝

右大臣正二位

實朝卿へ

鎌倉右大臣

世のやうつねうじゆもみたまご
あやめどもくわづひのほんぐ
新勅様囲慕
顔をくらはる
がモモ形しすく詞と強押辞と力ナシと伯のや
もも能くも擱を可愛としむるもかわいとよ
擱をもかわいとよむるもかわいとよの縁がよも

アホきうまうめくわちくへゆくテ
あとうかくもくわくめくめくゆくゆくゆくゆく
櫻ももももひのゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
きくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
うゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
うゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
要ううかなシモのモモホシテモテ上のカナシモト
カナシカナシモトモトモトモトモトモトモトモト

美吉野ト云美

水ノ奥ニテ水ノ

清ノ奥ニ

ルト云ニハ

非也

吉野郡ノ吉野

ツツケテ云時

必美吉野ト云

く

新吉野集秋 持名のまゝ

けまよし野のあまくまくあら吉野社津野のまゝ
のとくでよつがとうもと齊明天皇再送をせ
はて天武持統の兩朝を度みほまく御
ちるを爲へ候かどもひりゆくサヨウナリ
と夜の九月のまゝくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづの

まゝくわづのくわづのくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづのくわづの
くわづのくわづのくわづのくわづのくわづのくわづの

父法性寺忠道

公云

僧正始道快ト云

養和元年慈圓

ト改嘉禎二年

號爲慈鑄和

尚

前大僧正慈圓

霞

わふみよ人ほせよ民よれほよ
我そいそすじよみよのよ

千載集

霞

オフケナクシムオフミオガト結用ミモ肩シキモテ肩シキナリ

タフナキナリ

オカサカ
チカラのまゝにヨタニ才あつて才あつて

を承認する所にて、元和ちとて正徳二年十月に信
正を後嗣す。左は、生と死の間には、文治三年八
月集めの中であつて五年を以て前のことである。

內大臣寔宗公

貞應元年八月

新勅撰

雪ナラテミタ本語雪ニハアフテトモヤ約ナリ
テモホシ雪のアツミタヌク多のアツミタヌク

۱۷۳

五條三位俊成
即ノ男入

卷之三

權中納言定家

あめくどくおゆの浦の夕景
下如水の夕景
夏
土

反辭之

天福元年十二月出家

新勅撰集惠 建保六年内重政等人等
御手本於保浦之橋ノ久し今も待テテニヤキ

モホイシハ乃シカシムニヨガレヒミツタマハ

從二位家隆

壬生中納言光
隆御ノ男ノ

文曆二年從二
位

風の如き人情の少ぬやうなあらへ
新軌道云々 実はあれど年か薄入肉の仕事
風の如き風ノヨリアヒテ風の本のまゝもあらず
シヨギル

高倉院第四皇
子也
壽永三年七月
即位建久九年
十一月讓位歲
十九在位十五

後鳥羽院

卷之三

山塚園へ之ノギトモニシテカヒソギモ約テニギト
リガ御事シ拔カトモニアリハシナリ也タモ
ス風ノ北月ヨリ吹キ拂キナリ秋ノツルイモ御事
シ桶の音ナシトモカシナリの音ナシトモシナリ
シ桶の音ナシトモカシナリの音ナシトモシナリ

崩年九月其國仁治三
土佑國同七年七月後
月壤位御歲三四年後
四歲久三年歲四十
月負禪滿歲十一
也兼元四年十
後鳥羽院皇子

順德院

あ底からまくらのまゝにあはれを終つて
の後朝ひし朝アヂキナキとち朝の事アモ省音
千五穀の事キラ氣キテ五穀アモアギキ
ト云ふて味五味人道のみ常モ茲モ五穀
の味傳ちて味氣氣と云五常の事傳
せまく味氣氣代とくらうとくらう苦の文字
を傳へる事無事無事アモアギキ
アモキキ
毎頼 每益 每為 每狀 每モチヤリ皆モアニ
トモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ
アモキキ
アモサヰ
アモカモ

卷之三

國を猶もうち恍惚とあやうびを以て人を歎の聲ぞ

かくはかくとひきのじる記のとくに自力の只
ほんまんと化すよりとあらわすがくわくと
もへて既に古来奇自天智天白玉乃及家隆雅經
卿と終ふ二人の名とて謂ひ不審ちう考
くま紙詔傳の始と終との間のほんまんと
強てり百つもあらざるのとあるをほんまんと
もへて入夜金五升送とてかかんでるもへて
かかんでるもへてかかんでるもへてかかんで
かかんでるもへてかかんでるもへてかかんで
奇とよろづく跡とほんまんとへてかかんで

武將ノ居所也
妻八水穂傳二
了リ

御製 仇土國ニテ
思ヒキヤ雲ノ
上ヲバヨソニ
見テマノハ入テ

追加

神代の傳の御代を尊之の御と並んで定家の御代
御代の傳の御代を尊之の御と並んで定家の御代
人也むばくの御代の傳の御代を尊之の御と並んで定家の御代
えもくの御代の傳の御代を尊之の御と並んで定家の御代
堂の御代の傳の御代を尊之の御と並んで定家の御代
七番の著者必老翁の御代の傳の御代を尊之の御代
法則を今も後の人此法則を外臆度ももいはれど改考
時も奇くも妙の説もすこしある老ももまかきに付く
神明の法則をほせり人をつむじて所がまことに人間す
学をあらわす神の御代の御代

崇山堂藏



於丹波國多紀郡大山宮邑園田貞和許

正六書道 天保九戊戌歲彌生日 七十三歲書

杉菴志道大人書目錄

火水與傳全

七卷之內

水磚傳

布斗麻述の青天もとて天地未生一元の三氣のそよぎより及んを
母胎の一偏弱て八十連の水火をもつて御てこそ息母胎を
かくしてよりつとの云けらむ息の形なり。形を見えず。云ふ別
形伎名あり。形伎名は人生をまうちの水火の形亦神の
神形ある。とく壽くもす

